

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特別扱承認雑誌第六二七号
明治二十一年十月十日第三種郵便物認可 毎月一回一日発行
平成十五年九月一日発行 第四百六卷第九号

ホトトギス

九月号



平成十四年九月一日 夢三俳句大会

上州の風爽やかに渡りけり
踏み入りし花野の道のなきところ
ロープウェイ動きはじめし朝の露

九月十日 ロイヤル俳壇

仲秋の湖面渡りて来たる風
女郎花野の一部分染め上げし
三日月の光を得つつ傾きぬ
女郎花そこより消えてゐる径
山国の仲秋に旅踏み入りし

九月七日 日本伝統俳句協会全国俳句大会

旅心はるかな森の法師蟬

九月十日 大阪倶楽部

新しきコーヒーショップ鱗雲
これよりは花野に沈む道となる

九月十日 綿業倶楽部

満ちゆける月の刻々ありにけり
旅疲れ霧の山路を抜けて来し
六甲の霧の去来にカーブ切る
月満ちてゆける旅路のありにけり

九月十二日 清交社

屋の虫素通りしたる靴の音
旅果てて良夜の家路急がざる
桔梗や山の風音荒くとも
虫の音を聞き分けて来し遊歩道
惜みつつ一人の良夜なりしかな
忌日過ぎそれより虫の夜を重ね
桔梗活け客間に静寂生れけり
洋間にも日本の心桔梗活け

咲くときの緊張ほどけたる桔梗
九月十三日 工業倶楽部
旅終へて夜長の稿を継ぎにけり
丸ビルの月まだ名もなきと思ひつゝ
夜々の月まだ名もなきと思ひつゝ

九月十五日 下萌句会

雲重きまま夜々月の育ちゆく
九月十六日 龍野市民俳句大会
大方は盗人萩の花野かな
秋早日和よるこぶこと勿れ

九月十七日 有恒倶楽部

葉裏よりこぼす香のあり葛の花
秋の灯の消えたるよりの夜の静寂
松虫や砂丘にもある草の原
待たれぬしもの秋の雨なりしかな

九月十七日 無名会

松虫を聞きとめしより増えてぬし
稿債も灯下親しむ心あり
どことなくどこからとなく葛の花
秋潮のふふむ風歩す一時間
初月の消え山の端沈みけり

九月十七日 無名会

秋潮の迅き瀬戸航く壇ノ浦
初月のこれより期待置ける夜に
風強き日の秋潮と思はれず
初月を見し敦煌を偲ぶのみ
見えて来し鳥見つつ航く秋の潮

九月十八日 夏潮句会

口中を驚かしたる唐辛子
ともかくも書き上げしこと爽やかに
人使ひ荒き満席爽やかに
辛さうに見えてさもなき唐辛子
爽やかに見えて忌日の縁重ねけり

九月十九日 祝「桑海」三十周年

桑海の明るき道のつづきををり
九月十九日 祝「由布二百五十号」
秋晴や由布の稜線かがやかに
九月十九日 祝「牡丹」十五年 米寿
牡丹の 大輪を祝ぎ 米寿 祝ぐ

九月二十日 時雨会

虫鳴かせ店の主の見当らず
芋水車掛国は虚子の曾遊の地
芋水車掛国は虚子の曾遊の地
大山の花野へ旅路とどのへり
今何が咲いてゐるか問ふ花野
見えてゐる待宵の月探しをり

九月二十一日 句会と講演の会

待宵の月のあしたは間はざりし
九月二十日 野分会
地震跡に増えて竹藪竹の春
一劃の紛るるはなく竹の春
よべ月の零せし露を踏みて訪ふ
ふり返り露けき旅路なりしこと

九月二十五日 幢大橋宵火様

萩寺の句碑の消息携へて
九月二十八日 中国ホトトギス同人会
森中が茸句つてをりにけり
毒茸の方が食べられさうなりし
茸売 森の入口にて 鬻ぐ
変幻の霧山道を降りて来し
霧に傘閉ぢて山雨に又開く
太陽も霧の呪縛を解きそむる
隠れたる松虫草もありにけり

九月二十九日 中国ホトトギス俳句大会

水音の中に秋晴ありにけり
爽やかに歩くところを写さるる
大山の機嫌を問ふも雲の秋

フィリピンの旅（その三）

稲畑汀子

二日目の朝を迎えた。八時三十分の出発に合わせるように同行五名は余裕をもってロビーに集まった。今日は少し長いドライブになる。この旅の一番の目的であるアキノ元大統領をお訪ねすることになっていた。暗殺されたご主人のベニグノ・アキノ氏の記念館を訪ねることにもなっていた。お供えに花を持って行かなければと気がついて、あやさん、美奇さんに相談し、あらかじめホテルのロビーにある店に頼んで置くことにした。

朝、出発の時間に間に合うように花束は早々と出来ていて受け取ることが出来た。見事な百合の花束であった。

「よかったわ。百合の花束にして」

「本当、きつとアキノさんにお喜びいただけるわよ」

ワゴンに乗り込むと花束が少し不安定で、これからの二時間半のドライブが思いやられたが、膝の上に横にして乗せるとうまく納まった。百合の香りが車の中に溢れた。

ホテルの車寄せには次々車が入ってくる。我々が乗り込むと車はすぐに出発した。

フィリピンは日本とは反対の右側通行である。何となく乗っていても馴れないのでは？とすることが多かったが二日目になると渋

滞を抜けていく運転手の手際に段々に馴れて行った。間もなくハイウエーになったのか見事に飛ばして行くのが心地よい。自分で運転しないのだから無責任になっていた。

フィリピンの道路事情は余りよいとは言えない。十年前、このハイウエーで第一回目の地球ボランティア協会で視察のために募集句に入賞した人達が訪問したとき台風に遇い、水浸しになって六時間立ち往生したのがこのハイウエーだったらしい。

トンネルを抜けてハイウエーが終わる場所で二台のパトカーが検問しているのか赤いランプが回って警官らしい人達が車を停めた。

「何かしら？」

思わず私は乗り出すようにその方を見た。窓を開けて運転手が警官と話している。スピード違反で捕まったのかもしれないとびっくりした。やがてパトカーに乗り込んだ警官のあとに我々の車はついて走り出した。

「ここから渋滞するのでアキノさんより差し向けられたパトカーが先導してくれるのです」

「え？ 捕まったのではないのですか」

「勿論！ ここからまだ大分ありますが先導してもらえるので安心です」

田中大使が笑って説明して下さる。ピーポーピーポーと前を走る車を払うように走るパトカーの後ろを走るのも大変であるがごぼう抜きである。

運転免許を取って間もない頃、私は渋滞していた道でパトカーのすぐ後ろについてすいすいと他の車を抜いて走ったことがあった。「後ろの車、横に入りなさい」スピーカーから大きな声が聞こえて来るのは私の車に言っているのだと知ってあわてて横に入ったことを思い出していた。

道が茶色の細かい砂に覆われていて車が通ると砂ぼこりが立ち前が見にくい道に差しかかった。その左の奥に何年か前に噴火したピナツボ火山があつて、この一帯も被害を受け今でも植物が育ちにくいと言う。ピナツボ山は霞がかかつていて見えないが、噴火して山が削られ低くなったと聞いた。

ピーポーピーポー、時々パトカーは対向車線に車がないと見ると反対車線へ乗り出して走る。正面から車が近づいてくると手を車窓から伸ばして右を走っている車を停めてその中に戻るように割り込んで行く。又対向車線を走る。車窓から出している手にいつか真っ白なハンカチが握られて横の車を後ろに払うように合図するようになった。そのパトカーの後にぴたりついて走る我我の車の運転手も見事と言っほかはない。

「運転が巧くなかったら完全にぶつかっているでしょうね」という私に田中大使は

「ここで事故を起こしたら忽ち失職するので、運転手の腕は大したものですよ」と説明される。

「私はフィリピンでは運転出来そうにありませんね。でも少ししゃつ

てみたい気持ちもあるけれど」

「ははは、慣れでしょうね。ここは皆が職を分担して働くのでそれぞれの専門の仕事があるのです。若い人でも運転手を雇うのですよ」予定の時間よりぐんと早くアキノセンタールのある門に辿り着いた。パトカーは自分の役目を終えると手を挙げて走り去った。

近代的な高いビルの前に我々の乗ったワゴン車は滑るようにつまんだ。硝子越しに赤い洋服を着たアキノさんがにこやかに立っているのが見えた。

廣太郎句帳

廣太郎

平成十四年九月一日 夢二忌俳句大会

風になる人蝶になる花野人
吾亦紅天与の色といふ孤高

九月四日 一水会

朝露の芝生に富士を近づけて

九月五日 蕉心会

新築のビル蟋蟀に目覚めゆく

蜻蛉のために都心の空がある

芭蕉葉を破り初めたる風かとも

川風にやつと秋声聞き初むる

秋扇主役の女優待つてをり

震災忌知るや知らずや鷗浮く

川風と海風と秋風は別

九月八日 福井県同人会

相寄りて露の柏翠虚子の句碑

灯下親し越前親し今年はも

先づ越前和紙に露けき一筆を

枝豆に福井の邂逅とはなれり

九月十日 三番町句会

道逸れて松虫草になる女

羽音止み松虫草の一部分

その中に風を拒みて吾亦紅

九月十二日 土筆会

宵闇の闇を都心は知らざりし

宵闇に丸ビルの皓々と灯り

宵闇に我黒々と帰宅せり
分け入れば花野大花野と拓け
九月十四日 かずさホトトギス会四百号記念句会
祝ぎ心乗せし車窓に秋の潮

九月十七日 草木瓜会

花野なる色なき色を置きてこそ

迷ひたる心も花野なればこそ

上りたる鮭に修羅場といふ大河

寝転べば我も花野の一部分

九月十九日 登高会

秋燕天動説てふ昔あり

秋刀魚焼く煙に消防車の来たる

吾亦紅風袈裟懸けにしてをりぬ

ついでありつういもありて吾亦紅

九月二十日 時雨会

虫売の籠に子の顔はりつきし

芋水車ここにも生活ありにけり

その中に孤高の一花大花野

月談義丸ビル談義歳談義

待宵に都心のビルも輝けり

九月二十一日 ホトトギス社句会

ふらふらと来て秋の蚊のしたたかに

仰臥して遺せし宝瀬祭忌

九月二十四日 若水会

寝転べばこも地球や鯛雲

ころころと鶉の逃げてゆきにけり

大空を知らず鶉の走りけり

鶉頬張りし喪服の女かな

雑詠 汀子選

かなかなに明けかなかなに夕心
 かなかなにつくづく命惜しきかな
 今日夫妻来ぬ日本樟の咲き替はる
 花の闇遠く向うにホテルの灯
 大いなるものの統べある花の闇
 しろじろと花に若木の力あり
 花の闇ふとあの人に会へさうな
 山気とは朝桜よりはじまりぬ
 朝桜枝の主日の落着きに
 天台の門跡寺の木下闇
 夏料理なりし平目のえんがはも
 輝けば黄が金となり金鳳華
 佐藤健癌と格闘せる聖夜
 一生は花火にも似し佐藤健
 ガンジスに散骨と聞く人の秋
 飛魚とぶ水平線のあるかぎり
 暗闇を祭の色として使ふ
 筍はどかと置くものくらがりに

江津 井上哲王
 同
 榎原 稲岡 長
 同
 同
 東京 稲畑廣太郎
 同
 同
 京都 粟津松彩子
 同
 同
 姫路 桑田青虎
 同
 同
 東京 後藤立夫
 同
 同

初夏の手に真白な処女句集
 汽車鳴りつばなし立夏のおもちや箱
 気付くときいつも曇天桐の花
 花人といふも吉野にありてこそ
 空甘き色に霞める別れかな
 別れとは桜に風の起りけり
 巨き訃をこころに刻み涅槃西風
 雪便りなほありつも日脚伸ぶ
 夢多き余生といはん春の宵
 庭隅に片寄せ植うる萩根分
 手間かけて半日がかり菊根分
 捨てるもの手早く菖蒲根分して
 湖沿ひの家みな低し余花の里
 余花の影湖に映して村しづか
 所詮世は一人の旅路遠蛙
 大朝寝して匂やかに現れし
 花仰ぐ朝の空腹感よけれ
 中空に落花の道の現れし
 草踏めば草芳しといふ言葉
 太陽を入れてそれぞれしやぼん玉
 町医者の一曰諸子釣仲間
 客人の数の櫟揃へ待つ
 櫟の決して急いで櫟の右左
 履き馴れて来て櫟の右左

八尾 岩垣子鹿
 同
 同
 東京 今井千鶴子
 同
 同
 龍野 浅井青陽子
 同
 同
 福岡 松尾緑富
 同
 同
 西宮 吉村けん
 同
 同
 神戸 山田弘子
 同
 同
 福知山 大槻右城
 同
 同
 日野 木村享史
 同
 同

雑詠句評（八月号より）

み吉野の山路阻みてゐる臙 東京 河野美奇

近ごろの吉野山は電車や自動車で簡単に行けるようになったが、昔も今も山桜の美しさは変わらず、私は日本一と思う。吉野には何回か行ったが、特に奥吉野の西行庵付近の桜は忘れることができない。吉野は平安初期からの修験道の拠点として知られ、万葉以来多くの歌によまれた歌枕の地でもあり、また南朝にまつわる史跡も多い。行ってみると、けっこう吉野の山は深い。斎藤茂吉は「春の日はきらひわたりてみよしのの吉野の山はふかぶかで見ゆ」とよんでいるが、吉野は美称の「み」を冠した「み吉野」で、古からの信仰や憧れの対象としての地である。踏み込んでゆきたいその山路を阻んでいるものはすべてを臙臙とさせるおぼろである。その臙のゆえに、いつそう吉野にひきつけられている自分を発見する。情趣の深い句。（暮潮）

花の吉野山は誰もが一度は行ってみたい桜の名所である。そこには歴史が深く関わっているのも又興味深い。古くは南朝の悲劇、義経と静御前、又西行や芭蕉の縁もある。その歴史を辿る作者が夜の山道を阻む何かを感じ臙という季題に語らせていて詩情をより濃く伝えているのが見事。（汀子）

東京に雨水結びし日の訣れ 神戸 山田弘子

雨が地上の草木などに当たって、ガラス細工のように凍っていたのが雨水である。山上など、寒冷の地で見られることが多いが、その日は、東京という、冬も温暖化が問題になっているような大都会で、雨水が見られた。そういう極寒の日に、大切な人の永遠の訣れをしなければならなかったというのである。作者の心のすべてを、雨水が代弁してくれている。（純也）

その日東京は寒く雲が降っていた。木々の枝は雨水を結びきらきらと輝いているのが悲しみを誘った。親しい人との最後の訣れには自然もまた悲しみを告げるかのように厳しい姿を見せているのであろうか。追悼のしみじみとした情感溢れる句である。

（汀子）
（以下略）

若水集

廣太郎選

踊子草・松蟬

あの頃は踊子草に励まされ 金沢 坂井光代
 剽軽な吾子の一面踊草 同
 松蟬のつと鳴き出しぬ城日和 同
 松蟬の鳴くを音符に描きたし 横浜 大野雑草子
 補聴器をつけ松蟬の音となる 同
 ワグナーの別墅松蟬鳴きぬたる 同
 松蟬が季節教へてくれてをり 神戸 木村淳一郎
 松蟬といふ裏方の声を聞く 同
 誠実に鳴き松蟬の声となる 同
 松蟬の森千年を息はしむ 静岡 須藤常央
 松蟬の森の呼吸を広げたる 同
 松蟬の森の時間を濃くしたる 同
 踊子草繁茂の庭に退院す 白石 鈴木とみ子
 試歩今日も内濠沿ひに踊花 同
 松蟬の里の鎮守に今頃は 同
 静けさに咲きひろごりぬ踊子草 茨木 大野伊都子
 踊子草かざしこれより修験径 同
 雨の三味風のジオロン踊子草 同

松蟬を聴きたく三度ペンションへ 東京 深町丘峰
 松蟬にリフトの高さありにけり 同
 松蟬を掴まへて来し茶屋主 同
 むらさきの花の装ひ踊草 弘前 中村鎮雄
 醜草に見られて風の踊花 同
 風止んで伏すも憩ひや踊花 同
 寂しさに群れてゐるなり踊子草 長野 鈴木しどみ
 踊子草踊らぬときはもの思ふ 同
 踊子草踊れ踊れと空のあり 同
 踊子草上げたる脚のよく揃ふ 同
 踊子草刈られて置かれても踊る 熊本 内藤悦子
 踊子草空を蹴上げて風にある 同
 落武者の靈氣踊子草の舞ふ 大津 石川多歌司
 大寺の松蟬遠く風に鳴く 同
 堂裏の松の春蟬鳴き澄める 同
 ステージに立つには幼踊子草 いわき 志賀青柿
 踊子草待ちしはパートナーの風 同
 ステップのかはる風きし踊子草 同
 青春の蝦夷春蟬のわかれかな 昭島 しもだたかし
 バスで来しわれを松蟬あやしめり 同
 踊子草笠も扇もそれらしく 同
 松蟬や森の匂ひを搔き立てて 岡山 児島倫子
 鳴き続く松蟬に沖晴れてきし 同
 松蟬と森林浴をわかち合ひ 同

若水集句評 廣太郎

あの頃は踊子草に励まされ 金沢 坂井光代

以前何かで苦勞された作者なのである。その時は「踊子草に励まされ」と、その事実だけを表現しているが、その平明さによって却って作者の感慨が読者に伝わってくる。「あの頃」と時期を特定していない表現からも余韻が感じられる。

ワグナーの別墅松蟬鳴きぬたる 横浜 大野雜草子

ドイツオペラの巨匠リヒャルト・ワグナーの名前は殆どの方が御存知であろう。存命中から、バイエルンのルードヴィヒ二世の援助があったり、高名であったそうだが、その「別墅」つまり広い別荘であろう。広大な景を「松蟬」がダイナミックに鳴き渡っている姿が爽快である。

雜草を抜けて踊子草となる 荒尾 大川内みのる

筆者は奈良県の吉野で見た印象が強いのだが、「踊子草」は雜草と一緒にさりげなく咲いている。多数の草の中から抜きん出て

可憐に咲いている姿は正に名前の通りなのである。

松蟬に風の奥行生れぬし 三原 成末知歌子

姿は小さく、まるで蜂のような「松蟬」であるが、鳴き声は意外と太く、聞く人によつては少しうるさいと感じる事もあるようだが、その太い声から立体感のある姿が見て取れる。「風の奥行生れ」と詩的な表現にも風情がある。

闇と言ふ幕のありけり踊子草 福山 藤井千草

笠をかぶった踊り子のような形をしている、正に名前の由来でもあり、そんな表現の作品も多かったが、この句は、まるで大地全体が舞台であり、何ともダイナミックである。「闇と言ふ幕」が下り、ひとつのショーの終焉までも見て取れる。

一の谷松蟬の声渡りゆく 仙台 菊地茂吉

神戸市にある、あの源平合戦で有名な場所であろう。それを前提に鑑賞すると、何か「松蟬」が平家の怨念を伝えているような鳴き方に聞こえてしまう。何か歴史の重みを感じる句である。(以下略)